

わが黒髪を切られなんかとをそる、聲洋々乎として耳にみてり、其事日をかさね月をわたりて、云やまざりつるに、いづくともなく、まじなひ事に異國より悪魔の風のふき來るに、そこふきもどせ伊勢の神風、といへる和歌を、うつし來りて、門戸にはり、簪にまとへり、玄かあれども此事猶云やまざりけるに、又いづくともなく、髮切虫は、剃刀の牙はさみの手足、いりがはらの玄たにかくれりと云ふらせる風説に、草のなびけるがごとし、かくてぞ此もの打わりすてよといへるほどこそあれ、町々家々に門前になげうち、道路にはふらかして、行かふ人もすこぶる足をそばたつるに及べり、おもふにわらる、は不幸たりといへど、又其名をのこせるは幸ならずや、猶節分は、古年の終り、新玉の始めなれば、人々のつゝ、しむ夜なりとて、年男におほせて、齋明盛服して、大つやかにはやさせ、鬼はそと福はうちへと打はらひ、惡魔外道も西の海へとなやらふにぞ、此いりがはらも時をえて、竈に媚よの心をこりぞすべかりける、

一夜明て花の春にやいりがはら

勿萬器謙熬瓦殿 名醫理世次眞儒 鐵銅固忌地黃製 天下其方不可無

焙籠

〔和漢三才圖會三十一〕焙籠 焙音 焗音 俗云保以呂宇

按焙籠焙藥種及茶之籠其底張紙凡火乾物曰焙焗火乾熬曰炒焗蓋炒則用砂鍋焙則用焙籠

七釐

〔倭訓栞中編〕十「玄ちりん 爐の類をいふ七厘也、藥を煮酒を煖むるに便利なるをもて、炭の價銀七厘にして足るをもて名くといへり、

〔守貞漫稿生業〕瓦器賣

京坂カンテキト火爐カンテキハカンヘキノ訛カ此爐忽ニ炭ヲ火トス故ニ癩癬ト云也江戸ニ

テハ七厘ト云

〔和漢三才圖會三十一〕火爐 今云火波知略○中